

## 一 騎 当 千 の 兵

愛媛県 佐々木 楽 次

私は、大正七（一九一八）年二月一日、愛媛県新居浜市垣生で生まれました。父は日露戦争当時、現役で従軍し、旅順二〇三高地で戦い、満州奉天の会戦まで二年余り兵役を過ごした古強者でした。私の兄弟は男女合わせて六男五女、八番目の六男です。家業は農業が主で水田・畑・養蚕・塩田と多忙、皆健康な家庭でした。

私の軍歴は、昭和十（一九三五）年六月一日、佐世保海兵団へ入団、昭和二十一年三月一日復員です。故郷の垣生村を目前にして、「国破れて山河あり。何の顔有りて父母に見えん」の詩を思い出し胸が熱くなり、交差点の上でしばらく動けなかつた。

私の小学校時代の先生は、「お前は他の学科はまあまあだが、算術と理科だけは良くできる。体

操はクラスで一番できる。クラスの者は皆お前の言う事は一番良く聞くようだ。お前はちよつと勉強する気持ちが出れば、級長にでもなる力もっているのだが」と言う。それがきつかけか、今までに本を読み、授業もよく聞くようになっていった。

昭和六年、垣生尋常小学校卒業、県立新居農学校へ。三年生の頃は体も大きく相撲を取っても五人抜きで優勝したり、下肥の桶を二人で一杯を運ぶのが普通なのに一人で二杯（一荷）を担ぎ運んで施肥していた。

昭和八年新居浜港へ巡航で軍艦が来た。港よりかなり沖合へ、当時の日本の新鋭艦として知られ、流線型でスマートな一万トン級の巡洋艦「羽黒」が投錨、停泊する。新居浜、西条、界隈の町村の顔役や在郷軍人会、青年団、中学生が順番待ちで見学した。私の学校も何組かに分かれて見学した。圧倒されるような巨大な艦の舷梯を登り、一列並びでセーラー服の粋な水兵の説明を聞きながら、

艦上艦内を一巡見学した。この時兵隊に行くなら海軍に行き、軍艦に乗って日本全国、外国まで行って見たいと思った。

この見学が、後に海軍へ志願して行く初めの動機となり、十八歳より二十九歳までの青年時代を海軍に身を置くことになる。思えばこの時、宿命的に海軍行きのレールに乗せられたのだろうか。

昭和九年九月、海軍の志願兵募集と国鉄の募集が同時にあつた。国鉄は今治で、海軍は西条で、両方を受験する。国鉄の採用通知は十二月頃あつた。海軍の試験も合格していたが、採用通知が来なかつたので、国鉄の試験雇いで西条駅で勤務する。二カ月余り後、海軍志願兵の採用通知が、父の名前で垣生村役場から来た。合格採用されるとは自分ながら意外であつた。

(西条管内の受験者八十六人、合格者十一人、採用通知五人)。

思った通り母が猛反対、適令二十一歳で入営し

ても地獄へでも行くように言われている軍隊へ、それも海軍のことなどほとんど知らない所へ、母は徴兵でないので「役場の兵事係の正次さんの所へ行って断わって来るから行くなと」半泣顔で猛反対される。私も次第に不安になるが、国鉄へ行って小僧扱いで、掃除と水撒き、当直者の寢床敷き等で面白い勤務ではなく、いつも呑気者で通っていた私も内心迷っていた。

母が夕食の時、「明日役場へ一緒に行こう」と言い出す。その時父は「いつまでも家にいる子ではない。男の子は一度は軍隊へ行った方がよい。ちよつと早いか遅いかだから行け行け」と言う。そこで母もしぶしぶ納得したのか言わなくなった。

昭和十年六月一日、佐世保海兵団へ入団するため五月三十日出発することになる。日の丸の小旗を持って一族郎党、村の有志、在郷軍人、青年団ほか、かなりの人が多喜浜駅まで送ってくれる。まだ十七歳四月私一人だけの見送りで、ちよつと面映ゆい気持ちと晴れがましい気持ち。生まれて

初めて大勢の前、高い所で挨拶と見送りのお礼を言う。挨拶は納屋の中で一人で大分稽古をしておいたので何とか上手にできた。

私は家を万歳で出る時、母が見えないので釜屋へ行つて声をかけたが、目に涙がいつぱいで何も言わなかった。あの気丈な母の涙を生まれて初めて見た。一番下の男の子が軍隊へ行くのがかなりショックだったのだろう。駅へも来ず釜屋の中で別れも言わず出発したことが長い間気になりつらかった。

多喜浜駅から松山、三津浜港（船）小倉港、小倉駅、佐世保の道順であった。愛媛県の全員約四十五〜五十人は三津浜に集合した。新居浜からは、水兵三人、機関兵二人だった。

昭和十年六月一日、佐世保海兵団へ入団。私は子供の頃から、機械いじりが好きだったので、機関科を第一志望に、第二志望は兵科（水兵）としました。当時は兵科としては水兵、機関兵、主計

兵、看護兵でした。海兵団卒業後、乙飛と経理学校は全員受験できました。

水 兵：砲術、水雷、信号、電信。

機関兵：釜、機械、電気、工作。

航空科：昭和十二年頃 飛行兵、整備兵。

海兵団入団は（四等機関兵）は年二回。前期と後期にあり、前期は一月十日、全員徴募兵である。

後期は六月一日 志願兵。一個分隊一八〇人、

三個分隊（機関兵）

七月一日 徴募兵。一個分隊一八〇人、

四個分隊（機関兵）

十一月三十日卒業、三等機関兵となる。

第二十二分隊九教班、兵籍番号佐志機一二三七

〇。

こうして日本でただ一人の生涯番号を貰う。入団後二〜三日は被服の支給や食事の支度、寝具（ハンモック）の説明等をやさしく教えてくれて、先

輩の言う程でもないと思ったが、一週間十日程経った頃より様子が一変した。朝の総員起こしのラッパから夜の消灯ラッパが鳴るまで、目が回るような毎日。

三カ月間は外出もなく訓練と学科、水泳、ボート漕ぎ、軍艦「敷島」での艦務実習等で、艦上勤務を教えると言うより叩き込むである。休憩以外の行動はすべて駆け足、それでも時間が足りぬ。そして六・七・八月の真夏の暑さが加わる。

その頃、隣の分隊の一人が、練習場の一角にある訓練用の軍艦「松島」の艦橋より飛び降り自殺をする。それ程に訓練は厳しかったが、全員同年兵で人並みにやればよいので、そんな自殺する程とは一度も思わなかった。

同年兵の中で自殺者が出る程の訓練、少しは緩めるか楽になるかと話の種となったが、しかし噂とは正反対、葬式が終わった翌日から「貴様ら十年の志願兵は軍隊を何と思っている。自殺する者は早く死ねばよい。そんな者は戦場では手足まと

いになるだけ。何人自殺しようが一騎当千の兵を作らねば日本の将来はあり得ない」等々で、今以上に厳しくなるが、私は順応性が人並みにあったのか、大して苦にもならず、十一月に海兵団を卒業し、第二十一水雷隊「真鶴」に乗艦することになった。

私の乗艦「真鶴」は舞鶴で任務に就くため乗艦、即日出港。第二十一水雷隊は「千鳥」「初雁」「友鶴」が僚艦である。佐世保港を出ると玄界灘、生まれて初めての航海、三角波で有名な海域、五三トン程の小型艦である。忽ち船酔い、額より脂汗、ゲロゲロと胃袋の物は全部出してしまふ。古参兵には予想通りのことで、汚されてはたまらないと、紐のついた石油缶を新兵全員の首にかけて、上甲板に出ると怒鳴られる。夕食も喉を通らず、目が回るような苦しみである。

舞鶴へ入港するまで訓練しながらの航海だが、この三日間酔いつ放し。瀬戸内海の海しか知らない私は、日本海の荒波に徹底的に打ちのめされ、

全く自信を失ってしまった。これからの義務年限三年半、どうなるのかと本気で心細かった。

舞鶴で二十日間新兵教育。初めの一週間程は教育班長と教育係の二人は、やさしく教えてくれたが、その後は一八〇度の変わりようである。汽缶室、機械室、補機電気室、舵取機室、と順次教育を受けたが、一度教育を受けたことは翌日覚えていないと、バルブのハンドルに歯形が付くまで噛まされ、気合が足りないと総員何らかの罰を受ける。

舞鶴海軍機関学校（江田島の海軍兵学校と同じ士官養成学校）生徒の艦務実習と戦闘訓練に出港、夜を日に継ぐ訓練である。航海、船酔いと共に吹雪の寒さ、一番下級の新三等兵には目が回る程、精神的にも肉体的にもギリギリの毎日が続く。総員起床より就寝点呼まで、コマネズミのように動いていても追われつ放し。夜、吊床より古兵に気を使いながら起きて内務をする。食器、洗面器磨

き、昼間の教育の復習を人気の少ない常夜灯の下で、深夜まで必死に終わらせる。

そんな毎日が二十日程続き、筆記試験とレポート書きをやらされ、新兵教育は終了、そして各部署に配属される。

機関科八人中、汽缶科二、機械三、電気一、補機一、工作一。私はどういう訳か電気の班に配属された。機関全体について一応の教育は受けたが、以後十年、電気関係の任務を続けることになる。

艦首から艦尾まで、艦内すべての区割りまで張り巡らされた電路、発電機三機（タービン二機、ジーゼル一機）より送電される前後部の配電盤、主電路より分電箱を経て各兵器の駆動用電動機、照明灯、電機計器、電信、信号用の電源への給電に至る網の目のように張り巡らされた配線を、一応マスターするまで、航海当直中も非番の時も、内務に追われながら夢中で行う。船酔いでへドを吐く時は、隠れるようにして靴下の中に吐き、海中に投棄する。「新兵の癖に酔っ払うなどゼイタ

ク」と何度か叩かれながら半年、ようやく多少は要領と余裕ができるようになる。日本海特有の三角波と吹雪も、春の訪れと共に治まり、航海も訓練も結構やって行けるようになる。

ひと訓練航海すると港へ寄港上陸する。朝鮮半島の北は清津、南は釜山、山口県油谷湾から山陰の境港、宮津港、敦賀、小浜、七尾湾、新潟港、佐渡の相川、酒田、青森と機関学校生徒の巡航訓練である。寄港すると旨い物をたらふく食べられるのが何よりも楽しかった。

昭和十一年八月上旬、久しぶりに佐世保に帰る。初めての休暇が十日間あり、底抜けに嬉しかった。久しぶりの我が家、天国に帰ったようなノビノビとした一週間である。この時程父母の優しさや難さを味わったことはなかった。一週間は夢のように過ぎ去り、帰艦の前夜は父母の真ん中に寝て、色々話を決して弱音は吐かず、人並みの事ぐらい何でもできるとやせ我慢を張って安心さ

す。父は日露戦争の経験者、軍隊の甘い辛いを知っているのか、ニコニコと笑っていた。翌日は多喜浜駅まで送ってくれ、汽車の窓から手を振って別れたが、涙が出る程だった。満十八歳。今の高校生である。

九月初め、佐世保で海軍工機学校普通科(電気)の入学試験を受けていた。電気科は定員が少ないし、一番難しいと言われ、九〇点以上採らないと合格しないと言われていたので、一回目は期待していなかったが合格した。入学命令を受ける。班長は「一回で合格したのはお前だけだ」と我がことのように喜んでくれた。私は学校へ行くことよりも、小艦艇での苦しい勤務から逃れることの方が嬉しかった。

横須賀の海軍工機学校普通科(電気)。ここでもまた六カ月毎日鍛えられる。海兵団と同様、教育部隊は上下の区別なく教育を受け、内務の食事、掃除、洗濯等平等に受け持ち、教科や訓練も三等兵

の私も一等兵、二等兵の先輩も、起床より就寝まですべて同じ生徒として受ける。ただし規律が厳しく時間に追われる毎日であった。

教育主任〇〇中佐の入校式の訓示に「一騎当千の兵を養成する教育訓練を六カ月間で行う。強靱な精神力、優れた技術を身につけ云々」。居住区以外の行動はすべて駆足、生徒間の敬礼は無用、集合の指令は拡声器一回でどこにいても三分以内、艦で「戦闘配置に就け」の命令同様に、第一日の初めに言われる。

普電百八十人、十五班、私は七班、十二人中の十一番、すべて用意されていた。教室の机にも百七十一番とあり、これは卒業するまで変わらない。教科書は机の中に全部入れてあり、三角定規二、小刀、計算尺、筆記道具ひと揃いが用意されていた。入校日の一日は居住区、教室、実験室、工作室、煮炊所等を教育助手と巡り、身の回りの整理で終わる。二日目から、起床の六時三〇分より温習時間の終わる九時三〇分までの十五時間、それ

でも時間が足りないほど次から次へと教科が課せられる。抜き打ちのテストは毎日のように続いた。

三月頃になると落伍者が出て来て、「成績不良につき退校。原隊復帰」の命で朝食会後裏門より退校する者が出てくる。考えようによつては何とか卒業しても、後四年間の義務年限を課せられ、何かにつけて風下で先が見えた海軍にいるよりも退校して満期をとり、娑婆での生き方を選ぶ方が慥巧である。私もそんな事も脳裏をかすめることもあった。

入校して三カ月、教育期間の半ば、最もしんどい時期である。しかし百八十人全員が同じ条件下での競争。負け犬にはなりたくないし、原隊へおめおめ帰るのはなお嫌だった。僅か六カ月であったが、あれ程全力で勉強した時期はないように思う。一人だけなら、あれ程有無を言わせぬ詰め込み教育は受けられないだろう。夜十時の消灯後も、人に見えない常夜灯の下、便所は満員の時が多い。怒鳴られながら教室で取ったメモを暗記する。私

も小型の懐中電灯で毛布を被って暗記した。要は出題の山を張るのである。

抜き打ちで「起立」で机の通路に出る。前へ進めで通路を回る。止まった席で助手が配った答案用紙に「始め」で自分の番号を書き、答案を書き始める。次に起立の号令まで懸命に書くが十五、二十分間に半分書ければ出来で、全部は到底書けない程の出題である。メモを取り、山を張るより方法がないのである。

教科書はまず応用算数、電気磁気より始める。応用算数は代数、幾何、三角で、後に交流理論に必要な最低限を教わる。代数は二次方程式まで、対数を少々、二十日程ほとんど毎日である。「普電の兵の頭を叩けばサイン、コサイン、タンゼント、インピーダンスにリヤクタンスの音が出る」と言われる程である。この二冊の教科書が終われば卒業まで見ることがない。

続いて直流、交流、発電機、電動機、電路、計器、通信、電話器、電灯、照明等、教室で教わる。

午後の終わりの二時間は実験室で五、六人の組で電圧計、電流計、発電機、抵抗器等の結線運転をして記録を出し、特性曲線等、試験記録を提出する。すべて習ったことは実験し、記録を書き、卒業試験として提出する。

このような毎日を走っても走っても時間が足りない。時間がほしい日が続く。三カ月程経った頃、中間総合テスト（四時間）がある。その頃には東京、靖國神社参拝や鎌倉等、日曜日毎に分隊毎に分かれて行くことになり、ちよつと息抜きができるようになる。

人間とは不思議なもので、三カ月も経てば過酷な環境にも次第に適応することを覚える。あの詰込教育も、やればできる。幸い私は父母のお陰で、農学校で代数、幾何、物理、化学を習っていたし、最も得意な科目であったので、楽に高得点をとれたと思っていた。

十二月、総合テスト、実験記録提出、工作物のメッキ仕上げ提出等で、教室と実験室、工作室で

忙しい日が卒業前日まで続く。卒業二週間程前に乗艦希望調査があり、私は小艦艇のしんどさは身に沁みていたので、一番大きい戦艦を第一希望、第二希望に航空母艦とした。長いそして短い六カ月が過ぎ卒業、第一希望の戦艦「金剛」に配属される。元の上官よりの手紙に、「十番以内の卒業なら、寝ていてもトップ昇進、三十番以内でないとなら、寝ていてもトップ昇進、三十番以内でないとなら、鎮守府、人事部の所管になるので、高等科へは書類選考で漏れる。普通科は全力での戦闘と思ってやれ云々」を思い出し、自分ながら良くやったと思っていた。

昭和十一年十一月、二等機関兵に進級、学校を出ると掌電気兵の袖章を着けての乗艦、四、三、二等兵と三階級上ったのである。

昭和十二年一月、第一艦隊第三戦隊「金剛」で前期の訓練航海に出る。教育部隊と異なり実施部隊は先任、後任の規律がきびしく、先任の言う事は命令と指示であり違反することは許されない。

年の若い志願兵も、三、四歳も年上の徴募兵も、同年兵であれば同等で俺と貴様で通用する。その点私は同年では最も若い一人であった。

配属されると教育期間などなく、早速所定の班に入り勤務につく。私は計器と電池を管理する班で、戦闘配置は前部交流機室であった。兵員全員戦闘配置があり、配員表を見れば一目でわかり、余分な者など一人もない。一期訓練（二月～七月）が終わると配置変更があり、転入と転出も同時に行われ、艦隊休暇を貰って帰郷することになる。二期は八月下旬～十一月で全艦隊の総合訓練である。

昭和十二年に乗艦し、昭和十四年下士官に任官するまで、二年数カ月「金剛」での勤務で電路班、発電機、電動機班と配置を経験した。全長二二〇メートル最下段の二重底から艦橋の最上段階まで十四階程もある。この区割に張り巡らされた電路、電気機器の補修、管理点検業務で艦の隅々まで回り、最も充実した時期であった。

昭和十四年十一月、航空母艦「千歳」へ乗艦、第四艦隊の旗艦として南洋群島方面で訓練航海に出る。台湾高雄港、バシー海峡を通過してパラオ島へ赤道直下の島々、サンゴ礁（リーフ）に囲まれた群島を初めて見る私にとっては珍しい物ばかり。海は透き通るように五〜六メートルなら手に取るように見え、原色で色鮮やかな魚が手の届く所で泳ぐ。大小様々な姿、形をしているのに、しばらく見とれる。こんな海中を龍宮と言うのだからかと思った。

パラオは支庁舎のある所で、土でできた島である。こういうのも南洋群島はほとんどはサンゴの隆起してできた島で、その数二千を数えると言われる。島の内、数える程しかない中央の島の周囲を、海上に出ている所、海中で浅瀬になっている所が防波堤の役もしている。リーフの中は内海で、リーフの切れている所は船が這入る水道となっている。

昭和十五年九月、サイパンに寄港中に分隊長に

呼ばれ「高等科へ選考入学」の通達が来ているとの知らせであった。「千歳」での配置は電動機班で、戦闘配置は舵取機室であった。定員四人。私は機長一等兵で、機械の普通科出の秋田ほか二人である。「千歳」の勤務はのびのびとした南方系の勤務で、寒さに弱い暑さに強い私には快適な日々であった。上陸しても防暑服、半袖、半パンで身軽く、サンゴ礁の海で泳ぎ、カナカ族の踊りを見て回って遊んだ。カナカ族の貝と里芋の石焼料理も結構旨かった。

昭和十五年九月末、横須賀港に帰る。長い間、南洋群島での航海で船体の塗料も落ち、所々赤く錆びていて、外見もくたびれた感じであった。海軍工廠のドック入りし、十日間程で化粧直しが完了、十月半ばの紀元二千六百年祭の日本海軍最後の大観艦式に臨む。

お召艦「比叡」に天皇陛下が乗艦しての観艦式である。第一艦隊より第二、三、四艦隊ほか全艦が満艦飾で、夜はイルミネーションで飾り、壮大

な観艦式であった。私には最初で最後の観艦式であった。この時、下士官以上が記念章を貰った。

観艦式後、横須賀海軍工学校電気高等科へ入校することになり、空母「千歳」を退艦したが、約一年間の勤務はよい思い出となっている。

昭和十五年十月、「千歳」を後に工機学校へ。また、ここで九カ月、窮屈な教育部隊の生活かと緊張と期待交々であった。

試験は卒業前に一回あり、教科書を見て書いてもよい試験であった。勉強しなくても裏門退学もなく、全員卒業であった。私にとつては無試験入学と言うか、指名入学のようなもので、初めから試験にパスした感激もなく、入学して九カ月、なんとなく卒業したため、記憶に残っていることは少ない。

#### 大瀬崎見張所へ

海兵団より短期出張で、長崎県南松浦郡玉之浦町、福江島の西南端にある大瀬崎海軍見張所へ行

く。有名な大瀬崎灯台の山頂にある望楼見張り所に充電用発電機を設置する任務で、一人で長崎より船便で福江へ、さらにバスで玉之浦、徒歩で約一時間ようやく山頂へ辿り着く行程であった。

ここは兵科見張員七人、信号長一等兵曹一人、電信兵三等下士官一人、二等兵一人、機関兵下士官一人、二等兵一人、の計十二人の配置である。二十四時間交替で、十三センチの双眼鏡で見張り勤務である。電信兵は定期的に無線連絡を行い、機関兵は発電機運転、電池充電、電信室への送電の任務がある。至つてのんびりした陸上部隊。こんな配置もあったのかと思った。ここに新しい三キロワット発電機と、移動式短波送信発電機を設置するのが私の出張の仕事である。

一週間程で灯台下の海岸へ船積の発電機が揚げられる。頂上への引き上げには土地の人の協力が多大であった。据付けも手伝ってくれて一カ月の予定が三週間で終了し、人件費、機材費等計算し海兵団へ請求書を出した。か

なり安上がりと言ってきた。漁業組合の事務所で関係者一同で完成祝い。試運転、送電、電池充電、試験記録作りを終え、私の任務は終了した。

#### 南遣隊勤務

昭和十六年十二月六日夜、南洋群島のパラオ出港、どこへ行くのか知らされなかった。十二月八日航海中、宣戦布告、大東亜戦争に突入したことを知らされる。いよいよ来る所まで来た感じであった。私は輸送船上で、軍艦と違い戦闘配置を持たない苛立ちを感じていた。

やがてフィリピン、ミンダナオ島の南端のダバオに入港した。両舷に見える山並みの所々に煙がたなびいていた。日本軍攻撃の跡である。港に近づくにつれ硝煙の匂いが強くなり、戦地に来たことを体で感じた。しかし直接戦闘に参加した訳ではなかった。入港と

同時に上陸作戦が開始され、輸送船団の各船から一斉に上陸用舟艇により、兵員、兵器、物資の輸送が昼夜の別なく行われた。三々四日ですべて終わった。湾内には巡洋艦や駆逐艦が戦闘態形で待機していたが、一発の砲声も聞く事なく終わった。

最後の便で私達も上陸して、仮設の棧橋より周辺を見て廻った。軍艦よりの艦砲射撃で破壊された高台の砲台などは、山の形が変わる位吹き飛んで、周辺のヤシの木はすべて横倒しになり、見える範囲の家並みはすべて倒壊、火災を起こし灰燼となっていた。艦砲射撃の威力のすさまじさに驚いた。

翌朝ダバオを出港。護衛艦付きの航海で、ボルネオ島タラカンに入港。タバオと同じく入港と同時に上陸作戦。ここでは私達も物資の陸揚げ、兵員の輸送に協力した。上陸用舟艇での作業である。駆潜艇による掃海、機雷

除去、航路を確認しての入港で、さして危険とは思わなかったが、上陸用舟艇で陸岸近くの海面を通過中、砲台よりの砲撃を受ける。舟艇右舷近くの海上で破裂した砲弾の破片が炸裂音と同時に飛び散り、右舷より浸水と同時に三々四人の兵隊が血にまみれて倒れた。

兵科の艇長は飛び込み大声で「散開！」と叫ぶ。皆一斉に海へ飛び込み、必死で泳ぎ艇を離れて散開した。そのうちに艇は右舷に傾き沈んで行った。散開後数発の敵弾が飛来した。その後は機銃弾の射撃であった。かなり開いて泳いでいたので、弾は大分離れたところで「ブシュッ」と水煙をあげていた。

しばらくすると護衛艦の艦砲の発射音と共に、山頂の砲台に砲弾の命中した炸裂音が響いた。砲台からの砲撃と機銃攻撃は止んだが、日本の艦船からの砲撃が執拗に続き、幾つかの砲台へ命中した。砲弾の炸裂と同時に構築物が飛び散るのが泳ぎながらよく見え、ヤレ

ヤレ生きていたと思った。

山腹にある重油タンクを爆破したのか、黒煙をあげ次々と炎に包まれ、流れ落ちるように広まって海岸まで達し、海面上まで瞬間に炎の海となって黒煙に包まれた。海上で浮遊している者も必死で沖の方へ遠ざかるが、輻射熱で頭や顔面が熱くなり、時々海中に潜りながら泳いだ。日没になっても救助に来てくれそうにもなく、浮いたまゝ丸木に掴まって泳いでいた。赤道直下でも長くなると冷えるし、空腹と緊張のゆるみで夜がふけるに従って眠気に襲われる。タラカン島と本島の間は、狭い海峡になっていて潮の干満により流れが変る。いつの間にか流されて周囲で泳いでいた者も見えなくなり、三人が声をかけ合って泳いでいた。その夜はとうとう浮遊しながら夜が明けた。

タラカン島は遙か向こうに見えるくらいに

流されていたが、流れは島の方へ流れていた  
ので、私達三人は離れないように言いながら  
浮遊を続けた。午前中は流されながら泳いで  
いた。昼すぎ水上機が飛来し上空を通過する。  
三人とも手を振り、ありったけの大声で叫ん  
だが、水上機はそのまま飛び去った。見つけ  
ていてくれたら救助艇を出してくれると、  
藁にも縋がる思いで待ったが、一向に救助艇  
も見えないまま、数時間がすぎ、潮がまた反  
対方向に変わり遠くへ流される。

三人の中の一人が燃えていない海岸へ泳い  
で上がる。このままでは体がもたないと言  
出す。私は状況の判らない敵地へ上陸するこ  
との方がもっと危険であり、死につながり、  
丸腰で武器を持たない日本兵を見れば必ず攻  
撃されるし、間違えば捕虜。私は力尽きて沈  
んでも、と大声で怒鳴りつけ沖へ出る方へ泳  
ぐ。彼も一人では陸に上がることでもできず私  
に従って泳いでいた。

持っていた木から手が滑る。その都度海水  
を飲む。不安がつのがこんなことで死んで  
たまるか、全く犬死になると思った。日が大  
分西に沈む頃、点のように見えていた船が次  
第に大きくなり近づいて来た。救助艇であっ  
た。やっぱり水上機が見付けていてくれたの  
だった。大発艇と違って上陸用小型船であっ  
た。引き揚げて貰い船に上がってもフラフラ  
して、しゃがんでしまった。三十時間近い浮  
遊であった。「白山丸」に着いた時は日が暮れ  
ていた。タラカンで砲火と浮遊の初めての洗  
札を受けた。

「白山丸」も攻撃されて被弾し、舵取装置  
が使えなくなっていた。応急修理のためにタ  
ラカンで十日余り停泊した。その後の情報で  
は、オランダ軍の降伏により、砲台へ輸送船  
の入港であるとの通報がおくれ、このため砲  
台の攻撃を受けた日本軍も十数人の戦死者と

多くの負傷者を出した。オランダ軍は日本の軍艦の艦砲射撃の標的になり全員戦死した由である。

砲火を交えれば必ず多くの人命と兵器を消耗するのが戦争であり、過酷な状況下で一人でも多く、一艦でも多くの敵を倒すのが軍人の任務、使命である。そのため、常時いろいろな状況を想定して訓練を重ねるのである。

「白山丸」の応急修理も終わり、タラカンでの兵員物資の陸揚げ後、ボルネオ島バリックパパンへ向かって出港、二日程で入港した。ここではオランダ軍は降伏し戦闘は終わっていたが、バリックパパンとバンジャルマシンに通じる舗装道路に、地雷が数千個敷設されていて通行不能となっていた。この地雷除去のため、工作隊として編成された部隊に電気班として出動することとなる。

電気班は主として通信連絡用の電線の架設

と電源の確保である。一般工作兵は、探知器で地雷を除去して進み道路の安全を確保するのであるが、アスファルト舗装した道路に埋め込まれた地雷探知は容易なことではなかった。熱帯地方特有の雨期、雨は一日中止むことなく降り続く中、路面を手で撫でながら五〜六人横並びで進むのでなかなか進まない。目で見るとより探知器を使うよりも手でやる方が確実に安全と言っていた。四十〜五十キロの行程を三週間程かかった。私達の班は通信線の架設をしながら本隊との連絡に当たった。湿度は常時一〇〇%、むし暑い道路の両側は四〜五十メートルもある熱帯林、一歩も踏み込めないジャングルで、昼でも太陽の光が地上まで届かず薄暗い。ちよつと油断すると山の蛭が木から音もなく落ちてきて血を吸われる。蚊が昼夜の別なく集まってくる。防蚊剤を体に塗っていても長くは持たない。蛇、ブトの類に攻められる。全く閉口という以外

ない。

熱帯は食べ物や果物が沢山あると思っていたが全く逆で、すぐ食べられる物など何一つない。日光が強くて柔い葉の植物は全く無く、果物もすぐ取って口へ入れるものは無い。本当に食べられる物は少ない。流れている水等も茶色に淀んだ水で、日本人は飲むと間違いなく下痢をする。風土病としてマラリア、テング熱があつて、長くいると大抵の人が一度や二度やられる。とにかくボルネオ島のジャングル地帯は日本人にとっては住み難い所である。

私は虫一匹もない艦上勤務が恋しくなつた頃、ボルネオ島南部のバンジャルマシンに到着した。この町も日本軍が占領していた。続いてセレベス島南端のマカッサルに入港した。マカッサルの町はボルネオ、セレベス島の政治の中心地で、大きい庁舎や学校、病院

もあり、港もかなり大きい船でも接岸できる良い港で、大きな倉庫等が並んでいた。赤道より南の南緯七度。「白山丸」の残りの者全員マカッサルで下船し、私は軍政府の司令部で勤務することとなる。他の者は水上警備隊と陸上警備隊へ配属されて行つた。

司令部の一階の一室で電気関係の下士官三、兵四、計七人の定員で、町全体の電気関係を見るのであるが、電気は火力発電所より環状主電路数十カ所の分電ボックスを経て配電されている。町単独の送電方式で、主電路は地下ケーブルが埋設されていて電柱は無く、町並みや道路がスッキリしており、また人が少ないため町は閑散としていた。任務は破壊された電路の復旧作業である。

幸い発電所が無傷だったので破壊された部分を切断し分割送電しながら復旧作業に当たる。毎日現地人の電工八十人、捕虜収容所よりの使役を使つての復旧作業である。私達は

電気関係だけであるが、勿論陸警隊、水警隊も同様に急ピッチで復旧を進めていた。現地のインドネシア人達は、今まで長い間オランダの植民地支配下で圧政に苦しんでいた反発もあり、日本軍に対しては非常に協力的であったので、復旧作業は急ピッチで進んだ。二十日か一カ月程して一部を残し、送電することができた。

昭和十七年六月、私は一等下士官の辞令を受ける。しばらくすると階級が変更になり、上等機関兵曹となる。インドネシア人の話によると、日本人、欧米人が一等国民、中国、インド人は二等国民、現地人は三等国民と自ら認めている。オランダ人の植民地教育が徹底していたのか、日本人は優秀な国民として一種の憧れさえ持って迎えられた。私は三カ月程の勤務であったが、勝ち戦の現地の印象は最高に良かった。

軍政部の役目も終わる時が来た。チモール島クーパンよりの拿補船の廻航を命ぜられ、駆逐艦の便でクーパンへ向け出港した。途中ジャワ島、スラバヤ、バリ島に寄港する。チモール島クーパンで、拿補船「モンテボコー」と言う病院船のような船を廻航し、マカッサルへ帰る。二週間程の航海だった。何日か後に再び「モンテボコー」を横須賀に廻航するためにマカッサルを出港し横須賀へ帰港した。昭和十七年六月末であった。

翌日、航空母艦「瑞鳳」に配属され乗艦する。三号発電機の機長である。勿論戦闘配置であり、ここは死に場所と覚悟した。

昭和十七年六月、ミッドウエー海戦で第一航空戦隊の日本主力空母「加賀」「赤城」「飛龍」「蒼龍」を失ったことは、私達航空戦隊にいる者にとつては大ショックであった。七月、横須賀出港してトラック島へ、ソロモン群島

へ急行し、海空戦の死闘を繰り返す。ラバウル、ブーゲンビルのブイン、ガダルカナル等での艦艇、航空機の消耗戦、昼夜を分かたぬ死闘であった。しかもアメリカ海軍の豊富な物量戦により、次第に後退し、「転戦」の名のもとに、ソロモンでは破れたことを身をもって知った。

その間幾度か飛行機補充のため北上、南下を繰り返した。敵の潜水艦の攻撃に晒される航海であった。いつ「総員戦闘配置に着け」の艦橋よりの号令がかかるか判らない毎日であり、号令と共にガバツと飛び起き、三号発電機室に走り、常時「起動準備完了」状態の発電機を起動し戦闘配電を行った。あの緊張感、今でも思うと身体が震える。復員後も夢を見て大声で飛び起きたことも何度かあった。

昭和十七年に乗艦した「瑞鳳」は運強い空母と言われ、度々の戦闘にも耐え、敵の潜水

艦攻撃を巧みにかわして最後の機動部隊の遊撃隊である。空母艦隊「瑞鶴」「瑞鳳」「千歳」「千代田」のひとつとして比島、沖縄空戦を戦った（昭和十九年十月二十五日）。ルソン島東北の太平洋で沈没するまで戦い続けた空母である。

昭和十七年の末、ガダルカナル島より撤退を始める。この海域での死闘で、多くの艦艇と航空機を消耗した末の撤退作戦では、また多くの犠牲を強いられた。あの昼夜を分かたぬ戦闘は、昭和十八年二月まで一カ月余り続いた。常時二直の戦闘配置、発電機室床プレートの上にキャンバスを敷き、エンカ服を着たままで交替で寝る状態が続いた。

朝早く全速で南下、飛行機を発艦させ、爆撃後帰還する飛行機を急速収容し、同時に全速で北上、敵の爆撃半径外に出る行動を何日も何日も繰り返した。

昭和十八年四月、飛行機を搭載してグアム島へ急遽輸送した。昼夜兼行で陸揚げ作業後、直ちに出港、呉へ帰港した。この頃戦況は悪化の一途を辿っていた。山本司令長官の戦死もこの頃であった。

昭和十九年五月、米軍はマリアナ群島サイパン、テナアンへ侵攻して来る。そしてマリアナ海空戦で西太平洋までの制海権を失い、私達もこれで「負けた」と思った。七月八日、サイパン島玉砕、マリアナ諸島が次々と玉砕、九月パラオ島玉砕、そして南洋諸島全域を失った。

この頃、兄の戦死を知る。東部ニューギニア、クムシ河で頭部機関砲弾貫通で戦死。昭和十八年一月二十五日とのこと。

昭和十九年十月二十日、呉を出て比島沖へ向かう。十月二十四日、飛行機発艦、戦闘状態に入る。二十五日午前九時頃、敵機来襲、

後部と左舷に被弾、飛行機収容不能となる。この被弾により左舷の四号発電機が破壊され、山之上機長以下四人戦死、後部の機銃群が全滅する。私の三号機は無事であった。私は次の攻撃に備えて戦闘配置に引き返し、戦闘食を済ませておくように命じ、次の戦闘に備える。

午後一時過ぎ敵機来襲、「戦闘配置につけ」の号令。艦はジグザグ航行か左右に傾き、高角砲の発射音が間断なく響く。その中に轟音と共に体ごとハネ上げられるように床鉄板に振り落とされる。魚雷が右舷後部に当たったらしい。海水は容赦なく侵入してくる。次の爆弾が命中してくる。海水は胸の高さまで浸水してくる。そして暗い艦内から幸運にも抱き抱えるようにして後甲板へ引き吊り上げてくれた。後甲板には何十人もの人が倒れたままだった。

間もなく甲板が沈み、波で洗われるように

なり、次々海に流し出された。私はタラカンで一夜浮遊した経験があるので、二五ミリ機銃の銃弾箱の空き箱を持って泳いだ。ルソン島遙か東方沖、波にさらわれてから十分位経っただろうか、「瑞鳳」は艦尾より海に引きずり込まれるように真っ直ぐ立って、発着甲板上の兵員諸共沈没して行った。午後三時四十分で時計が止まっていた。

この比島沖の海戦は三日間に及び、戦艦「武蔵」「山城」「扶桑」、航空母艦「瑞鶴」「瑞鳳」「千歳」「千代田」、巡洋艦九隻、駆逐艦の多くが沈没し、神風特攻隊も死に物狂いの戦闘を行った。僅かに残った艦艇が敵の艦砲射撃の合間を縫って、漂流生存者を急停止しながら救助した。多くの漂流者のうち、運良く何人が救助されたであろうか。私もその内の一人で、駆逐艦「楨」にロープで引き上げられた。

呉へ帰り、大竹海兵团へ移り、残務整理。約千人の乗員中、帰還は二百七十八人だった。十月二十八日佐世保へ、十一月十日、佐世保海兵团へ帰る。十二月に入り転勤希望を聞かれる。私の乗る艦はもう無いと思ったので、震洋特別攻撃隊の編成要員を希望する。十二月八日付で川棚特攻訓練所に入所する。最後の死に場所を得た思いであった。その頃は「生き様」の前に「死に様」を考えることが多かった。

昭和二十年二月三日、佐世保発、香港へ向かう。二月十四日、震洋特攻隊三個部隊（一〇七前川、三五木下、三六渡辺部隊）を積んだ輸送船団が無傷で香港に到着した。入港後、空襲をさけるために昼夜兼行で特攻艇を船より降ろし基地への廻航を急いだ。何かにつけて幸運に恵まれていた。それというのも、私達の出る一船前の部隊が敵潜の攻撃により、

濟州島沖で沈没したとのことであった。

私達の部隊（第三六震洋隊）は総員一八六  
人、特攻艇四八隻、兵器、糧秣などすべて向  
島へ海上運搬して格納し、ようやく落ち着い  
た頃、香港地区へ大編隊の攻撃による空襲が  
あった。私達は向島基地で防空壕用の木材運  
搬の作業中であつたので、直接の危険はまぬ  
がれた。しかし香港島や港の艦船に爆弾が投  
下され、轟音と共に黒煙に包まれ火災を起こ  
した。同時に基地より対空砲火が発射される。  
爆撃機は高度が高く、対空砲火が届かず悠々  
と飛び去る。煙が落ち着くと軍艦船体が沈み  
マストのみが見えている。

向島基地は仮の基地であり、本拠地となる  
南了島基地（香港島の西南一五キロ程）への  
移動を急がれた。南了島は前進基地のラサビ  
島ともに堅い花崗岩の島で、基地設営には予  
定以上の日数がかかり、仮の基地向島には一

カ月以上も留まった上でようやく本拠地の南  
了島へ転進した。

私は四月初め、准士官昇進の内示を分隊士  
より受けていた。本部での書類の事はすべて  
分隊士が済ませてくれていて被服の交換だけ  
であつた。私はサイパン、比島沖での戦闘に  
破れ、日本海軍による制空、制海権をほとん  
ど失つたことを身をもって実感していたので、  
内心、来るべき時が近付きつゝあることを感  
じていた。施設隊の便に便乗して香港へ帰り、  
水交社で何日か泊まり島へ帰る。八月の中頃  
であつた。

部隊長より終戦を知らされたのが八月十九  
日であつた。全員部隊長の訓辞を聞きながら  
静まり返っていたが、すすり泣く声があちこ  
ちで聞こえ、涙を流しながら無言で聞いてい  
た。

自暴自棄の言動をする者、茫然自失の者、

振り上げた拳のやり場もなく、つかい棒の外れたような不安定な状態が続いた。

平田分隊長は人事担当士官で最高齢、老練な手腕で兵達の心理状態をよく察知していた。早速出撃に備えて保管中の物資を放出配布するよう主計課へ指示し、日頃目にしない缶詰、タバコ、酒等大量に配給した。この大盤振舞はストレス解消には相当きいた。

八月三十日、イギリス占領軍が戦艦ほか三十隻を連ねて香港島に入港して来た。治安状態は日に日に悪化していて、島民の日本軍を見る目も全く変わり、不気味ささえ感じる位であった。イギリス軍が司令部、陸警、水警、部隊等と日本軍の武装解除をやっていると聞いた。香港部隊は武装解除後九龍地区へ移動となり、陸軍貨物廠へ集合した。

九月二十七日、貨物廠よりアノガイル収容所へ移る。この収容所は日本軍がイギリス軍捕虜を終戦まで入れていた所で、立場を逆に

して今度は我々が入ることになった。我々は第三キャンプに入る。十月一日より下士官、兵は労働使役に従事する。

昭和二十一年二月二十四日、「明日乗船。帰還準備せよ」との連絡あり。二月二十八日、鹿児島港へ入港した。鹿児島島の街は焼けて見る影もなかった。上陸して一番先に待っていたのが、キャンパスシートで作ったトンネル内でのDDT殺虫剤の洗礼であった。頭から足先まで餅に粉をまぶしたような状態でトンネルを通過した。

翌朝、人員点呼後、鹿児島駅へ。復員列車（貨物）に乗る。半分は無蓋貨車、下関よりは大阪行普通列車で私は尾道で下車、船で今治へ渡り、予讃線、多喜浜駅で下車する。尾道では十人余りが下車した。四国へ渡る者、瀬戸内の島々へ帰る者など大勢であった。

昭和二十一年三月一日午後四時過ぎであつ

た。誰も出迎えてくれる人もなく、ただ一人、プラットホームに降り、しばらく立ちすくんだ。

思えば十一年前の昭和十年五月三十日、同じプラットホームで大勢の人々に日の丸と歓呼の声に送られ、誇らし気に挨拶して出発して征ったことを想い出し、感無量であった。十年九カ月、長くもあり短いようでもあった。

労苦といえば新兵時代のビンタ、精神修養棒、最もきつかったのは投炭法であった。日露戦争の船で練習艦「敷島」と言う艦の釜の中へ、スコップですくった石炭を投げ込む、前後左右へまんべんなく平均に撒布できるように練習する。

復員後は家の農業を手伝いつつ、住友化学新居浜製造所へ就職し定年まで勤続した。結婚は、昭和二十三年十月、女、男、女と三児に恵まれ、孫は五人、妻ともども全員元気で

感謝の毎日です。

艦隊勤務中、熱帯地方航海中での珍しいことは、スコールを利用して上甲板で石鹼を使つてする入浴でサツパリしたものです。

香港のイギリス軍の収容所での生活は食料不足、栄養失調、マラリア、テング熱の併発で、無念にも帰国を目前にして死亡した戦友も少なくなかった。

最後に八十六歳の戦争体験者として次代を背負う若い世代へのいましめとして「戦争と平和」についてのこと。口先だけで「平和、平和」と叫んでも無駄、身も心も敵の攻撃をハネ返せる力を身につけないといかん。世の中は甘くないと考えて下さい。